

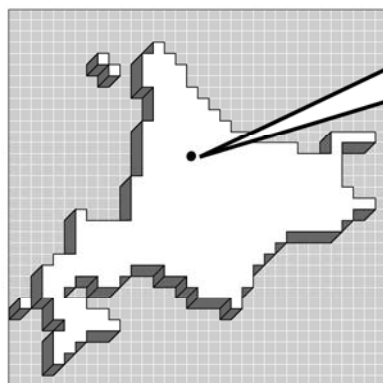


広大な緑の大地

【西側から眺めた剣淵町】

わがマチの自慢第五回は、剣淵町を取り上げ、里の風景、絵本のある町、心の豊かさを大切にしていく町をテーマに紹介します。

## 連載 わがマチの自慢 No.5



### 剣淵町

—絵本と福祉と農業が  
一体となった  
文化を創造—



【大地康雄さん(©「じんじん」製作委員会)】

1. スローシネマ(巻)「じんじん」  
を知っていますか?

俳優<sup>だいち</sup>大地<sup>ちゅう</sup>康雄<sup>さゆう</sup>さんは自身の主演映画の上映会で北海道を訪れた際、剣淵町出身の知人に招かれ、予定外の剣淵町を訪れた。



【撮影風景(©「じんじん」製作委員会)】



じんじんくせ!  
剣淵町!



絵本の里 剣淵町

【映画「じんじん」ポスター】

と最大級の謝意を述べた。映画が公開された平成二

「町民皆さんの優しさや豊かな田畑、そして満点の星空。剣淵町だからこそ完成した映画でした」

大地さんは、農家の人が農作業の合い間に「絵本の館」で学校帰りの子供たちに絵本の読み聞かせをしている場面に遭遇し、目を輝かせて聞き入る子供達に酷く感動し、「絵本を通じて、人間に必要な優しさや思いやりを伝えることができ

るのでは」と考えたという。

この映画「じんじん」は、二〇一一年三月十一日東日本大震災を経て、絵本が結ぶ人と人との絆を表現しようと企画したものであり、「剣淵町が絵本に夢と希望を託したように、人の心の優しさと親子の絆をテーマに、楽しく、そして切なく心に染みわたる映画を日本中に届けた」という思いが込められている。剣淵町の実名、剣淵町の絵本の里大賞、絵本

まつり、絵本の館等がそのまま映画の中に使われ、つまり、剣淵町の現実があるのまま映画の中に登場し、笑いと涙と感動の世界が描かれている。映画のナレーションは「伝えなければならないことを受け止めなければならないこと そんな大切なことを絵本が教えてくれました」と語る。

この企画に賛同した映画人、剣淵町の協力で平成二四年五月に撮影が始まった。

田植や畑の種まきが真っ盛り

盛りの時期だったが、町民がエキストラ出演や炊き出しなど約三カ月にわたって撮影を支えたのである。山田大樹監督は

五年春以降、劍淵町への観光客は増加し、平成二五年度には道の駅「絵本の里けんぶち」の来客数が初めて五〇万人を超え、ロケ地見学者も相次いでいる。また、全国の市町村議会による視察件数は、映画公開前の平成二四年度は三件だったが、二五年度一三件、二六年度は二七件に急増した。

スローシネマ方式きによる全国上映運動は、公開から丸二年で五〇〇カ所、観客数二〇万人に到達する見込みとのこと。なお、この映画は平成二六年五月末に「第13回イマジン・インディア国際映画祭マドリッド」(スペイン)において大地康雄さんが最優秀主演男優賞を受賞、九月には厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財に選ばれた。

(注)劇場公開だけに頼らず、ひとつひとつの県・市・町・村などで実行委員会を立ち上げ、数年をかけてゆっくりと各地のホールや公共施設で地域上映会を行っていくという公開方式の映画。

## 2. 劍淵町は：

劍淵町の人口は、昭和二九年の九、五三〇人をピークに減少し、平成一七年一〇月(国勢調査)三、九五二人、平成二七年二月一日現在三、三五八人となっている。六五歳以上の住民は約三五・八%を占め、高齢者の割合が高まってきている現実がある。

劍淵町は総面積の約半分を占める農耕地(五、七四〇haうち田三、二五三ha、畑二、四八七ha)を基盤とする農業を基幹産業とし、総就業人口の約四割が農業に従事しているが、年々この割合が減少している。主要な作物は、米、小麦、豆類、じゃがいもなどで、特にじゃがいもは、食用のほか、町内にある上川北部農協合理化澱粉工場ですん粉に精選され、また、加工用として大手食料品メーカーに出荷されている。特に平成二五年から「じゃがいもプロジェクト」を立ち上げ、



【 劍淵町を上空から撮る 】

名産地となるよう町を挙げて振興に努めている。

劍淵町の農業は、昭和四〇年代後半から昭和六〇年代前半までに実施した大規模な灌漑排水事業、土地基盤整備事業や大型機械の導入により、経営基盤の強化が図られている。しかし、米の生産調整をはじめ、農産物の輸入自由化など、農業施策の転換や後継者、担い手不足等で

大変厳しい状況下にあり、担い手対策が求められているところである。

工業は、第一次生産品の加工が主流であり、昭和五八年には地場産品加工研究センターと、平成一〇年には農産物加工研究施設（食のふる里館）を建設し、その施設を利用して地場の農産物を活かした加工品（トマト・にんじんジュース、味噌等）を地元の催しや市場に出荷している。

### 3. 絵本の里づくりへ

剣渕商工会青年部は昭和六三年二月に士別市在住の銅版画家小池暢子氏を招き、まちづくり講演会を開き、「小さな農業の町らしい文化のまちづくりをしませんか」との提言を受けた。

同年五月に教育委員会の支援を受け、当時児童図書編集長であった松居友氏を招き、「フランス、ドイツの田園風景にどこか似ていて、絵本の持つ自然や生命



【絵本の里大賞の1コマ】

を大切にする心を持った人たちが暮らすこのまちに絵本原画美術館ができたらどんなに素晴らしいことか。そうすれば、絵本をとおして世界中の人々との交流が生まれるはず」とのアドバイスを貰い、翌六月に有志による「けんぶち絵本の里を創ろう会」が設立され、活動が始った。

この活動に町も応え、ふるさと創生事

業資金の半額を充てる町の計画に対し、農業の苦境を訴える声などの反対意見があつたという。しかし、創ろう会の努力は次のものに結実している。

#### (1) 「けんぶち絵本の里大賞」の創設

前年度一年間（前年四月一日から三月三十一日まで）に日本国内で出版された絵本であることを応募条件とし、平成三年より創設された。募集期間に応募された絵本の中から、投票期間（八月一日から九月三〇日までの二カ月間）に「絵本の館」来館者により、好きな絵本五点以内を選んでもらい、一番得票を得た作品が大賞となる。

この賞は、専門の作家や知識者の選考ではなく、一般の読者（子どもから大人まで）によって選ばれる、どこにもないユニークな絵本賞である。

二四年の歴史を重ね、広く絵本作家や絵本出版社に知られるところとなり、毎年約三〇〇点の応募作品が「けんぶち絵

本の館」の所蔵作品となる仕組みである。投票期間中は、絵本の館に所蔵する貴重な原画や絵本作家の原画などの展示会、読み聞かせ会などを併せて開催している。

### (2) 「けんぶち絵本まつり」

「けんぶち絵本の里大賞」を受けて、翌年二月の第三土曜日から三月の第三日曜日までを「けんぶち絵本まつり月間」として、けんぶち絵本の里大賞各賞作品の絵本原画展、「けんぶち絵本の里大賞授賞式及び歓迎レセプション」や「受賞作家によるお話し会」などを開催している。特に歓迎レセプションでは、受賞作家による絵本の読み聞かせ、サイン会なども開かれ、普段接することのできない著名な絵本作家との交流が楽しめる。

### (3) 絵本の館

昭和一九年に建造され公民館に転用されていた旧役場庁舎を改修し使用していた(旧)絵本の館が老朽化したため平成

一六年に新築された。

新・絵本の館はバリアフリーとユニバーサルデザインの考え方を基に平屋建てとし、授乳室や多目的身障者トイレを設け、積雪寒冷地に対応した無落雪、深夜電力利用の蓄熱式床暖房を採用し、内

敷地面積：8,684.00㎡	
延床面積：1,798.11㎡	
構造：鉄筋コンクリート造り、一部鉄骨造り及び木造の平屋建て	
費用：622,294千円(北海道補助金100,000千円あり)	
設計費	18,165千円
用地取得費	6,950千円
建築・機械・電気設備費	559,928千円
備品・その他	37,251千円
目ざす機能：ア	絵本の図書館
	イ 絵本の美術館
	ウ 子供絵本ミュージアム
	エ 絵本の里の交流体験施設
	オ 地域づくりと産業活性化支援施設
蔵書数：	一般書、児童書と絵本など66,400冊余り



【絵本の館・内庭】

部の仕様は木や土壁のぬくもりと優しさと暖かさ、天井高による空間の広がり、演出、開放的な窓からの自然採光の利用などに配慮している。

間取りは、大きな中庭に面した通路を周回しながら、好きな絵本や一般書に出会ったり木の遊具で遊んだり、お話し会や工作教室に参加したり絵本原画展や

コンサートを鑑賞したりと、いろいろ巡る楽しみ、にぎわいや出会いを意識したとのこと。軽食喫茶「らくがき」やロビー、雑誌コーナー、小上がりなどの休憩スペースも随所に配置してある。

屋外空間は、周囲の芝生スペースに、安心して外遊びもできる中庭、青空や夜空がぐつと近くなる屋上の芝植栽付きの読書テラスなどもある。

備品類は、旧館のものを最大限に利用し、書架配置は可能な限り子供や車いす利用者に配慮し、貸し出し用の車椅子、ベビーカー、ベビーカーチェア、ベビーマット、ベビーマット、高齢者対応の読書肘掛けイス、拡大読書機等を新たに配備し、人に優しい施設を目指している。

新・絵本の館は、こうした考え方に基づく建物が評価され、平成二二年に一般社団法人公共建築協会の公共建築賞・優秀賞を受賞した。

#### 4. 次の世代へ

劍淵町西原地区に、社会福祉法人「劍淵北斗会」による障害者支援施設「劍淵西原学園」、「劍淵北の杜舎」があり、両施設一帯を「西原の里」と呼び、劍淵粘土を使用した陶器づくり、農産物づくりなど、地域の人々と一体となった活動を進めている。この「西原の里」は、絵本の里づくりの重要な推進役を果たしてきた。当初は、「西原の里」の福祉ネットを通じて絵本の里のPRを行い、けんぶち焼きや、さをり織りの絵本の里体験メニュー、絵本の里福祉フォーラム、西原の里芸術展などの事業に関わり、その他に「けんぶち絵本の里クリスマスゆうパック（絵本）」を平成七年から事業として取り組んだ（平成一九年頃終了）。絵本の館内の「喫茶・らくがき」は障がい者の自立と社会参加の場として西原の里が運営を担っている。

絵本の里らしい自然や人に優しい農業を実践し、安全な農産物を消費者に届けようと、まちの農業者が無農薬・低農薬（有機栽培）の生産者団体「劍淵・生命を育てる大地の会」を平成二年二月に結成し、全国の農業者、消費者との交流を進めている。絵本作家のデザインによるポスターやパッケージを作成し、安心で真心を込めた、付加価値の高いじやがいも、かぼちゃなどを全国に販路を拡大している。「絵本の里大賞」の副賞には劍淵産のおいしい農産物が贈られ、受賞者に大変喜ばれているとのこと。

平成二六年度地産地消優良活動表彰において、「絵本の里けんぶち V I V A マルシェ」が農林水産大臣賞（地域振興部門）を受賞した。

ただ黙々と作物を作るだけの農業は面白くない。みんなで何かに挑戦しようとの思いで、平成二二年四月に農協青年部員一三人で直接お客様がいる所へ軽トラックで出向いて、農産物等を販売する

「軽トラマルシェ」を開始した。活動を  
 拡げていく中で、農協青年部員等がこの  
 活動に自主的に参加しやすいよう、平成  
 二四年に「絵本の里けんぶち V I V A  
 マルシェ」に改組した。平成二五年一〇  
 月に「軽トラマルシェ」を商標登録する  
 ことにより、信頼度・信用度が増し、商



【絵本の里けんぶち V I V Aマルシェ】

品のブランド化が図られた。受賞の理由  
 は、地域農業の振興に貢献するとともに  
 地産地消の核となつていいる組織であり、  
 今後の発展・活躍が大いに期待できると  
 のことである。

剣淵町には他に冷凍加工品等をつくる  
 女性グループ、地場のものを利用した加  
 工研究会などの組織があり、元気な生産  
 者の活動の成果がまだまだ期待できる下  
 地がたくさんある。

剣淵町で子育てをしたいという家族が  
 現れ、絵本と福祉と農業が一体となつた  
 文化を創造し、絵本の持つ「温もりと優  
 しさ」に触れ、「思いやりのある豊かな  
 心」を育んでいくことが町民すべての願  
 いなのである。

（以上、剣淵町提供資料及び北海道新聞  
 記事より抜粋）



【けんぶち桜岡湖水まつりの賑わい】

### 〈取材後記〉

旭川から北へ、私には過酷なイメージ  
 のある塩狩峠を越えた先に、日本人が忘  
 れかけている原風景がある。スローライ  
 フが似合う絵本の里を訪れてみませんか。

一般社団法人 北海道地域農業研究所

特別研究員 西野義隆